
お姉ちゃんの聖杯戦争

字乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姉ちゃんの聖杯戦争

【Nコード】

N7280R

【作者名】

字乃

【あらすじ】

(※11.05.03 | あらすじとキーワードを編集しました)

ちょっとオタクな社会人のお姉さんが、死神の不注意で死んでしまい、後輩に進められたエロゲーの主人公のお姉ちゃんに転生してしまうお話。でも、転生してからは前世の記憶は全く無いので導入部いらなかったかも…。

「願望機？ いや別にいらんけど」なお姉ちゃんが青い槍兵のマスター(？)になって弟を守るために奮闘するよ！

あと赤い弓兵ともなんかあるっぽい。

感想お待ちしております。

お姉ちゃんが生まれたワケ（前書き）

はじめまして、字乃あざのといいます。

処女作なので何かと変なところもあるかと思いますが、ご容赦願います…。

あと、作中に原作の台詞を持つてくることもあります。大半はうる覚えです。こんなこと言ってない！って突っ込みは言ってる内容が明らかに違う場合のみお願いします。m（　　）m

お姉ちゃんが生まれたワケ

「はあ、F a t e ねえ…」

「先輩本当に知らないんですか？型月ですよ？」

「うん、なんか有名サークルだよ。でも私、同人ゲーはあまり知らないんだよね」

「！？先輩！確かに型月は元同人サークルですけど、F a t e で商業デビューしたんですよ！！」

「え、そうなの？知らなかったわ」

「うわあ…先輩ってホント一途というか周り見てないというか…F a t e だって何年前の作品だと思ってんですか…」

こ、このやろう、人がおとなしく話聞いてれば…。後輩のくせに生意気な。

だいたい、女の私にギャルゲー？エロゲー？の話すんなよ。守備範囲外だっつーの。

そんな私は、いつまで経ってもジャンプが卒業できない女の子だぞ。（はあと）海賊さんたちがワイワイやってる漫画をこよなく愛します。

…浮気もするけどね。

「うーん、イケメン（ただし二次元に限る）好きな先輩なら知ってると思ってたんですけど…」

「は？イケメン？ギャルゲーなのに男が出てくるの？」

「先輩はギャルゲーをなんだと思ってるんですか。女だらけじゃ気持ち悪いですよ。ってか、Fateはギャルゲーじゃなくてエロゲーです。P S 2版はエロシーンカットされたけど」

移植までされるほど人気作品なのか。とか感心してたら、後輩が「えーと画像どこやったかなー」とかつぶやきながら私のパソコンにUSB差し込みやがった。

ちよつとまでそれ私のって以前に仕事用だぞ、なにしてやがる。

「あ、先輩有りましたよー！これこれ。この色黒とか全身青タイツとかモロ好みでしょ？」

「え、全身タイツはちよつと……ってなにこれいけめん！！」

そこには赤い服着た色黒で白髪 of イケメンと青い全身タイツで青い髪 of イケメンがいた。

ど、どうしよう、この青い方モロ好みすぎぎぎ……。後ろでふわりとながれてる髪がイイ！シッポみたい！！

「でしょー。あとこの金ぴかとか、ちよつと変化球でこのくそったれ外道神父とか、ストレートにサムライイとか」

「zipでくれ!!!ってあれ? ちょっと今個人的感想というか、酷いネタバレをされたような気が…」

「やだな、そんな事無いですよ先輩。縮小するの面倒なんで、これ(USB)借しますから休み明けに返して下さい」

「お前が神か!」

ありがとー!と歓喜の叫びを上げたのが一週間前。借りたUSBの中に入ってるFate/stay nightの画像データを自宅パソコンに落としたのもその日。

リビドーを押さえきれずにアーマーズンで注文したのが3日前。

そして、届いたのがついさっき…。あ、買ったのはPS2版ね。家のパソコン、ゲーム入れるほど容量無いの。このことを後輩に話したら「先輩運良いっすね。PS2版はフルボイスですよ」だって! 楽しみ!!

はー! 早くランサー(公式サイトで得た予備知識)に会いたい! 後輩の話だとプロログで早速会えるらしいジャマイカ! なんか変に笑いをこらえてたけど。

「…プロログ長くね? エロゲーって普通はこうなの?」

アーチャーって諏訪部さんなんだよね。エロー! 超エロー! 声だけでご飯3杯は行けます!

——なんだよ、消しちまうのか。もったいねえ——

！？この野性味あふれる神奈声は…！

ラン…ラン…

…あ、あれ？…動かないぞ…？え、仕様？

画面はテキストが表示されたまま先に進まない。自動送りにしてるのにだ。え、あれ？これ、壊れた？

コントローラーをガチャガチャ動かしても反応無し。まじかよ…リセットするか…。

憂鬱な気分で電源ボタンに触ろうとしたとたん、画面が真っ白になって目を開けてられないほどまぶしく光った。

「うおつまぶしっ」

ってふざけてる場合じゃねえ！どどどどうしよう！てかこれ普通のテレビって光ったりしないだろ！なにこれかわいいいいい！



「で、こっこんよ…」

トンネルを抜けるとそこは雪国でした。

「なわけねーだろ！ただの真っ白な空間だよ！」

——ただのとか酷い。頑張って作った空き部屋なのに：

何だ今のロリ声……。どこから聞こえてきたんだ。

——あのですね、実は、ちょっとした手違いであなた死んじゃったんですよ。

…分かった、夢だこれ。

——違いますー！夢なんかじゃないですー！確かにわたしの不注意で殺しちゃいましたけど、そんなに邪険にしなくても良いじゃないですかー！

「え、ちょっとまって。ホントにこれ夢じゃないの？私が死んだとか、え？」

——ホントです！あなたが暢気にゲームしてる間にストーカーに後ろから刺されて死んじゃったんですよ！

「え、は、ストーカー？」

——そうです！ストーカーって言ってもあなたのじゃないですけどね。上の階のお嬢さんのストーカーです。間違えてあなたの部屋に入れちゃいました。

「あ、はあ。ソウデスカ…。って！オカシイだろ！私が最後に見たのは神々しく光ったブラウン管テレビだぞ！ストーカーなんて知らないよ！」

——それはあれです。あまりにもショッキングな絵面なので、ご自分で適当に記憶をでっち上げちゃったんですね。

「まじかよ…。」

——まじです。なので、被害者のあなたには慰謝料代わりに何でも一つ願いを叶えて差し上げます！

「いや、その前にあなた誰ですか？」

——あ！申し遅れました！わたし、この界限の担当をしている死神です！

「死神…何かどうでも良いや…。で、死神なのに何でもかなえてくれるんですか？」

——はい！あ、でも生き返らせてくれ…ってのはムリです。ルールを変えちゃダメですから。

「じゃあ意味ないじゃん…！」

——そうですねー。お姉さんさっきやってたゲームの世界とか興味有ります？有りますよね？
夢中になってやってたんだから！

待て待て待て！この流れはなんかやばいぞ！

——よし！決めました！さっきのゲームえーつと…Fate？の登場人物にして上げます！！

「遠慮します！てか、物語を変えるのはそれこそダメだろ！」

——大丈夫です！ちょっと待って下さいね！お姉さんが入れる枠が開いてる平行世界を探しますから！

「そんなの探すならFateの平行世界じゃなくて、私がいた世界の平行世界を探せよ！」

——なんか世界世界言っててややこしいですね。

誰のせいだと思ってんだこいつは！！

——みつけましたよー！えーつとですねえ、この世界では衛宮士朗君のお姉さんの枠が開いてますね。

「は？士朗のお姉さんって…藤村先生じゃないの？」

——いえいえ、義理の方じゃなくて肉親の枠が開いてるんです。

「いや、開いてても行きませんよ。」

——えー！？何ですか！？

「いや、普通そうでしょ。そもそもあれって死ぬバッドエンド多いんでしょ？死ぬって分かってるなら私、聖杯戦争が始まる前に町から逃げるよ？話始まらないよ？」

——その辺は大丈夫です！向こうの世界に生まれた時点でお姉さんの記憶は抹消されますから！！

「はあ！？」

——というわけでお姉さん、行ってらっしゃーい！

「ちょっとまって！！」

——んもー。往生際が悪いですねー。

「うるさいっ！なんで記憶を消しちゃうの！？それじゃあホントに私死んじゃうじゃない！」

——仕方ないですよ。人間が記憶しておける容量なんて極微量なんですから！

「だって、だってそれじゃあ私が今まで頑張ってきたものはどうなるの！？私の人生は、」

——だから、もうお姉さんは死んじゃったんですよ。いい加減諦めてくださいよー。

「ひ、人を勝手に殺しておいてそんな…！」

——だから慰謝料代わりって言ってるじゃないですか。新しい人生、楽しんでくださいねー。

「や、やだ、やだやだやだ！や…」

だっ子のように拒否する私を気にも止めずに、あの忌々しいロリ声は私を真っ白な空間から突き落としたのだった。

お姉ちゃんが生まれたワケ（後書き）

見切り発車してしまいました。

これから暖かく見守ってくださいれば幸いです。

お姉ちゃんのこと(設定) 11.05.01追記(前書き)

随時更新していきます。

お姉ちゃんのこと（設定） 11. 05. 01 追記

衛宮 えみや 志都 しず

元は極々一般的な公務員（事務）でオタクだった。

転生してからは生前の記憶は抹消され、士朗の姉として生まれ、普通の女の子として育った。

stay night 本編では立派な社会人となっている。新都の小さなバーのバーテンダー見習いをしている。

冬木の大火災で弟の士朗以外の家族と友人を失ってからにはブラコンに拍車がかかった。

大火災が起きた原因が切嗣とそのサーヴァントに有ると知っている。これは切嗣が自ら話したのではなく、志都が問い詰めたら正直に話したからである。

このことから志都は切嗣が嫌いなのだが、士朗を助けてくれた事もあり、あまり好きではないにとどまっている。

士朗が習うなら私も習う！と言って切嗣から魔術を習う。

魔術師としての才能は士朗よりは上。壊れた物を自分が覚えている範囲までなら直すことが出来る。

衛宮邸の土蔵を掃除するときにとある魔術礼装を見つけ、切嗣と士朗に内緒で自分の物とする。

現在の年齢ははっきりと記載できないが、士郎とは7・8歳ほど離れている。

ぶっちゃけもう少しで三十路である。

ちなみに現在は、結婚どころか恋人すらない。学生時代はブイブイいわせていたらしい。（本人談）

外見設定

髪と瞳の色は士郎と同じ。髪の長さは肩甲骨辺りまでであるが、ウェーブをかけているため肩まで。

背丈等はだいたいライダーと同じ。ただし、グラマーではない。良く言えばスレンダー、悪く言えば無い。

スクロールすると画像が見れます。

$\wedge$ 6 6 0 3 | 4 2 0 3 2 3 $\vee$
i

冬木の大火災（前書き）

冒頭は士郎の家族とか生活とか、捏造が凄まじいです。

冬木の大火災

「志都ーいるー？ 士郎の迎え行ってきたくないー？」

居間からお母さんの声が聞こえた。今日は珍しく自分から宿題をしようという気持ちになったのに…。

「迎えって塾まで？ お母さんが行けばいいじゃん」

「お母さんこれから出なくちゃ行けないのよ。ほら、もうこんな時間なんだから子供一人で歩かせたくないでしょ？」

「でも…ほらあの緑のビルの裏ってなんか暗くていやだ」

「じゃあ士郎のバットでも持って行きなさい。あんたが怖いなら士郎はもっと怖いわよ」

ぐぬぬ。ごもつともですお母様…。

「はあゝ。わかりましたー。いってきまーす」

「気をつけてねー」

はあ、宿題やる気なくなっちゃった。あした友達に見せてもらおう…。



「あれ、何で姉ちゃん？お母さんは？そしてそのバットは何ですか…」

「なんか仕事だって。だって怖いじゃん夜って」

「姉ちゃん怖がりだなー」

あはは、って笑ってる…お母さんの嘘つき、士郎ったら全然怖がってないじゃん。

「ねえ士郎、怖いから手、繋いで」

「姉ちゃん…俺より10歳も上なのに情けなくないの…？」

「全然」

しかたないなあ、とか言いながらも手を繋いでくれる優しい弟。お姉ちゃん自慢です。

うう、このまま真っ直ぐ行けば緑のビルの暗い裏道を通ることに…。

「士郎、表通り歩かない？ここやだよ…」

「だってここが一番近道だぞ？俺お腹空いたから早く帰りたい」

「じゃあ走って行こ？」

「ほんとに怖がりだな、姉ちゃん」

怖いものは怖いんじゃない！

でも、それだけじゃないんだよね…なんか…怖いだけじゃなくて、いやな予感？がする…。

そのまま歩いていると、見えてきたのはツタが這って緑色の塗装もはげかけてる朽ちかけた不気味なビルではなく、真っ白な清潔感あふれる真新しいビルだった。

「あれ？あの緑のビル無くなったの？新しいビル建ってる」

「2週間くらい前に改装工事終わったんだよ。周りの人たちから苦情が多かったんだって。気味が悪いとか」

「へえー。あ！街灯も立ってるじゃん！これなら怖くないよ、士郎！」

「それでも手は離さないんだな、姉ちゃん」

ビルの裏道に対する恐怖は消えたけれど、さつきから感じてるいかな予感というやつは依然、消えてはいない。
それどころか、ますます酷くなっている。

その不安を士郎に悟られないように、笑顔で歩いていると私と士郎の体が真っ白なビルの陰に完全に隠れた。

途端、体験したこともないような爆音と炎を伴った衝撃が辺り一面に響いた。

「きゃああああああっ——！！！！」

「わああああっねっ姉ちゃんっ——！！」

士郎の私を呼ぶ声が聞こえる方を見ると、繋いでいたはずの手はほどけてしまっていた。

私の馬鹿！何でもっと強く握ってなかったの！？士郎のところに行かなきゃ、危ない、だって火が、火事になって、士郎が、士郎が危ない！

「し、士郎！待ってて！今、今そっち行くから！」

「姉ちゃん、危ないよ！火が！」

士郎の後ろの一軒家がさっきの爆風と飛んできた炎で今にも崩れそうになっている。

私は無我夢中で士郎を抱えてうつ伏せになった。みしみしと音を立てていた家は炎をまとって崩れ落ちてきた。



「――姉ちゃんっ！姉ちゃん！」

「…あ…士郎？…だいじょうぶ…？」

体がすごく熱い、特に背中が一番酷いかも。そりゃそうだよね、見渡す限り火、火、火だもの。

幸い、さっき崩れてきた瓦礫は運よく私と士郎の二人分だけの空間を空けてくれていた。

「士郎、とにかくここから出ようね、大丈夫だよ。お姉ちゃんがいるからね」

そうだ、私がいるんだから士郎を守らなくちゃ、私はお姉ちゃんなんだから士郎を守らなくちゃ。

「うん、うん、俺、平気だよ姉ちゃん、へいきだよ…」

「そっか、じゃあ手、繋ご？ね？」

「うん…」

士郎は泣きじゃくりたいのを我慢して私と手を繋いだ。

私は大丈夫だよって思いをこめて二度とこの手を手放さないようにぎゅっと握り締めた。



炎がないところ、人がいるところを求めて歩き続けた。途中で何人も大人や子供の真っ黒に焼けた死体を見たけれど、私たちにできることは何もなかった。それどころか、怖くて怖くて私は逃げるようにその場から離れた。

「あ…雨だよ姉ちゃん…」

士郎に言われてやっと気づいた。空を見上げると灰色の雨雲で埋め尽くされていて、少しずつ雨足が強くなっていた。

「ホントだ。もう、だいじょうぶだね、士郎…士郎？」

返事が聞こえなくて後ろにいる士郎を振り返ると、士郎は今にも倒れそうなほどフラフラと覚束ない足取りだった。

「っ——!! 士郎! しっかりして士郎!」

どさつと音を立てて士郎は倒れた。

「姉…ちゃん、…苦しいよ…」

「やだっ士郎! 士郎! ———っ誰か! 誰か助けて! 士郎が、士郎がっ——!!」

死んじゃう!! そんなの嫌だ! 士郎があんな、あんな真っ黒なのと同じになっちゃうなんて! やだ!

「やだ! やだよ士郎! 士郎…士郎…っうう、やだあ…」

私にできることなんて何もなく、泣き崩れてしまった。誰か大人を探しにいかうとも思っただけれど、離れている間に士郎に何かあったらと思うと、恐怖で体が動かなかった。

誰か、お願い…助けて…



前から足音がした。目の前にいる人はずいぶんと長い距離を走ってきたのだろうか、荒い呼吸が聞こえる。

この人なら、この人なら士郎を助けてくれるだろうか？

「た、助けてください、士郎が、弟が、私、何もできなくて…たす、助けてくださっ…」

咽がひくついて最後まで言うことができなかったけれど、目の前の人はわかってくれたみたいだった。

どこか、安心したように微笑み、倒れた士郎のすぐ傍に膝をついた。顔をよく見たら男の人だとわかった。

男の人は士郎を見てさっきの微笑を驚愕の色に塗り替えた。

「君、今から起こることを絶対に他言しないと誓えるかい？」

「は…？は、はいっ誓います！それで士郎が助かるなら、絶対に誰にも言いません！！だから、士郎を助けてっ——！！」

男の人は分かったと言って自分の胸に手をかざした。その手に黄金に光る何かが出てきた。

光はどんどん大きくなって何かの形をかたどった。私にはそれが何かは分からなかったけれど、とても暖かいものだと感じた。これはきっと士郎を助けてくれるものだ と確信できた。

でも、その暖かい何かの光はどんどん弱くなっていた。男の人は眉をひそめて次に決意したように瞳を鋭くした。

そして光る何かを士郎の胸にかざした。途端にそれは綺麗な粒子になって士郎の体に消えて行った。

「……これで、この子は大丈夫だよ。今のところはだけどね…」

「あの、ありがと、ひうつ、ありがとうございますっ…ありが、ヒツク、とうございます…」

「さあ、ここにいても危ない。君は立てるかな？無理なら二人とも僕がおぶって行こう」

私は何度も頷いて立ち上がった。男の人は士郎を抱き上げて、私の手を引いてくれた。

これが私達と衛宮切嗣の出会い。私と士郎の家族と友人達を殺した男との出会いだった。

冬木の大火災（後書き）

いまさらですが、登場人物たちが偽者っぽいんです。初心者だから許して…！

襲撃

時刻は4時半。もちろん朝のだ。

仕事が終わる疲労が溜まった心身を癒すために、愛しい愛しい弟の部屋へ抜き足差し足、音を立てずに忍び寄る。

そんなに朝早くから迷惑だって？そんな事は関係ない。

お姉ちゃんが身を粉にして働いてるのに弟がグッスリ寝てるなんて許せん。

いざ鎌倉！と意気込みながら勢い良く襖を開けた。

「しろーくーん！朝だよー！」

……………。

そこにはお目当ての人物どころか、布団すら敷いて無かった。

「あの子…また土蔵で寝てるな…」

そうなのだ。我が弟は機械弄りが好きで、夢中になると寝落ちするまでやっているのだ。汚れるとかいう理由で土蔵で。

なにもこんな寒い時期にまで土蔵でやらなくても…。風邪ひいてもお姉ちゃんには知らんぞ！

…嘘です。心配です。可愛い可愛い弟が風邪なんてひいたら、心配で夜しか寝れない。

うゝむ。このまま土蔵に行って土朗を起こすのも良いけど、いい加減眠いし疲れた。

どうせこのままにしておけば通い妻…じゃなくて、世話焼きな後輩ちゃんが来るだろう。

うん、寝よう。士郎が学校に行くときに起きればおはようも言えるだろうし。



「うう…寝過ぎた…士郎に行ってらっしゃい言えなかった…」

目が覚めて時刻を確認すると愛用のデジタル目覚まし時計は21時前を告げていた。この分では夕飯も終わっているだろうなあ。

しかたない、今日は確かバーも休みだしゆっくり遅めの夕食をいただくとしよう。

私は夕飯の残りを求めて居間へと向かった。

居間にはたらふく食べたらしいトラとそれをかいがいしく世話する可憐な少女が居た。

「あー！志都！こんな時間まで寝てるなんて不健康だぞー！」

「志都さんこんばんは。お夕飯はどうしますか？」

「こんばんは桜ちゃん。残ってるので良いからもらえるかな」

桜ちゃんは「はい」と快く頷き台所へ夕飯を暖めに行ってくれた。
「無視するなー！」と大河が吠えているが構わない。私はお腹が空いたのだ。トラを相手にする体力はない。

「あれ、士郎はまだ帰ってないの？今日はバイトじゃなかったはずだけど…。桜ちゃん何か聞いてない？」

「いえ…私はなにも。藤村先生はどうですか？」

「うー、志都のバーカ！って士郎？私はなにも聞いてないよ？私てつきり桜ちゃんが何か聞いてるのかと思ってた」

なんと、我が弟は家族に何も告げずに夜の町を歩き回る不良になっ
てしまったらしい。というのは冗談だが。士郎に限ってそれだけ
はないと断言できる。

「ま、男の子なんだし遅いからって心配すること無いでしょ。それ
より桜ちゃん帰り大丈夫？いつもは士郎が送っていたけど…」

「気にしないで下さい。大丈夫ですから」

気にするなと微笑まれても桜ちゃんは女の子なのだから心配だ。し
かも可愛い。可愛い上に極上のブツが二つも胸部にくっついている
のだ。よからぬ輩に襲われでもしたらと思うと気が気でない。

「いや、心配だ。大河、桜ちゃんのこと途中までで良いから送って行きなよ、教師でしょ」

「そうだねえ、こんな夜中に女の子一人は危ないよね。よし！桜ちゃん！先生に任せなさい！」

「でも、ご迷惑じゃ…」

どこまでも謙虚な大和撫子である。だが、トラを止めるにはその謙虚さは邪魔になるだけだ。

私が口を出す前に桜ちゃんはしっかりと大河が送って行くことに決まった。



私が夕食を食べ終わり、3人で談笑をしていると時刻は23時を少し過ぎる頃になっていた。

学生がこんな時間まで起きていては明日に響くということで、今日はこれで解散となった。

「じゃあねー志都。おっやすみー！」

「お邪魔しました。志都さんお休みなさい」

「大河、近所迷惑でしょうが。もつと静かにしなさい。桜ちゃんお邪魔だなんてとんでもないよ。また明日もよろしくね。二人ともお休み」

二人を玄関先まで見送り、鍵をかけようとしてまだ士朗が帰ってきていないのを思い出す。

「やだなあ。こんな時間に戸締まりできないとは…やっぱり士郎に携帯電話持たせようかな…」

最近、冬木市はずいぶんと物騒になってきていて通り魔とか一家惨殺とかのニュースばかりだ。そのほとんどが夜中に起こっているから早く鍵を閉めてしまいたい。だが、まだ帰ってきていない弟は携帯電話を持っていないため、鍵を閉めてしまうと帰ってきたときに開けてやれないのだ。

いつもそばにいる存在が居ないためか、嫌な想像ばかりしてしまい落ち着かない。

何もないよりは、と大河の祖父である雷画さんからいただいた日本刀を部屋から持ってくる。

この刀は雷画さんが集めているコレクションの一つだった。私が初めてコレクションを見せてもらったときに一目惚れをしてしまい、必死に頼み込んでやっとの思いでいただいた品だ。

名前はない。所謂無銘というやつだ。

刃紋は美しく緩い波を描いていて、柄と鞘には少し褪せた群青色の柄巻と下緒が使われている。

いつの時代の物か聞いたのだが、雷画さんも詳しくは知らないらしい。刀身だけならば新刀ではないかとは言われた。

後日調べてみると、新刀にも3つの種類があるらしい。雷画さんも結構テキトーな性格をしている…。

雷画さんからいただいたてからは自分で手入れをしているが、いささか不安である。一応、試し切りに豚肉などを使っているため切れ味は承知している。

だからこそ、不安であると言える。何を隠そう、私は剣術などこれっぽっちも分らないのだ。そんな私が切れ味抜群の刀を振り回して、自分はおろか、大切な人に怪我を負わせたらと思うと不安になる。

「でもまあ、無いよりは良いかな…」

自己解決して一息ついたところで静かな居間に玄関が控えめに開く音が響いき、息を飲む。

ギシ、ギシ、と居間へと続く廊下を歩く音が聞こえる。私は緊張で座り込んだまま動けない変わりに手に握っている刀を更に強く握りしめた。

居間と廊下を遮っている障子に影が映り、そこに立ち止まる。

そして、障子が開いた――

「きゃあああああつ——！！！」

「は！？あ、危ねっ——！！！」

恐怖に耐えきれずに悲鳴を上げながらその場で刀を振り回した。居間に入ろうとした人物は危険を感じて一步下がった。

「だだだだ誰ですか！？ココは確かに建物は立派ですけどそれだけなんですよ！！金目の物なんてこれっぽっちもありませんーっ！！！」

「ちょ、ちょっと待てって！落ち着けよ志都ねえ！俺だよ！」

「オレオレ詐欺ー！？！」

「違うって！士郎だ！」

え、と思って刀を振り回す腕を止め顔を上げるとそこには、胸元を真っ赤な血で染めた士郎がいた。

頭から血が引くような感覚がして、刀を握りしめていた手から力が抜ける。

「え、あ、士郎！ど、どうしようごめんね士郎、待ってね士郎、今あれ、救急車、救急車呼ぶから」

「あ、いや、志都ねえこれ違うんだ。志都ねえのせいじゃないから

落ち着いてくれ。救急車も呼ばなくて良いよ」

「でも、でもそれ、血…」

何、どういうことなの？そんなに血まみれな格好のくせに大丈夫って救急車必要ないって…まさか、

「まさか、それ士郎の血じゃなくて…返り、」

「違う。それは断じて違う」

士郎は「とりあえず落ち着けて」と言いながら、私の肩を掴んで座らせた。

「その、これはなんて言えばいいのか…とにかく俺は死んでないし、誰も傷つけてない。それだけは確かだから安心してくれ、志都ねえ」

「う、うん…」

士郎の言うとおり、士郎はちゃんと足があるし、士郎が誰かを傷つける、ましてや殺すなんて事は絶対にない。

士郎自身もなんと説明するべきか悩んでいるらしい。居間が再び静寂に包まれる。

そこに、

——カラカラ、カラカラ

「今の音…」

「あいつだ…追ってきたんだ！志都ねえ、どこから見つからないところに隠れててくれ！」

「え、士郎？」

そうだ、あの音は決壊に侵入者が入り込んだ音だ。

士郎は大河が置いていった転がっていた鉄板仕様のポスターを掴むとそれに強化の魔術をかけた。

私はさっきまで掴んでいた刀を拾い、士郎へ渡そうとした。

「士郎、これ、これの方が」

良いよと言おうとしたけれど、侵入者によって私の言葉は遮られた。

「やれやれ、痛みを感じないよう俺なりに気を遣ったんだがな」

そいつは私を背にして士郎と向き合っていた。

その背を見た瞬間に直感が告げた。こいつは人間じゃない――！！

人外の物へ対する恐怖とともに感じたのは、途方もない強さと眩しいまでの神聖さ。

青いスーツのような鎧に包まれた体は、男性らしいたくましい体つきで、けれど無駄なモノは一切ついていない。正直言って男性として非常に魅力的だと言える。

けれど男が手にしている禍々しいまでに真っ赤な棒――アレは槍だろうか――が更に恐怖を増大させた。

とても士郎の手に負える相手ではない。

逃げなければ、士郎を連れて逃げなければいけない！

私は無我夢中で男の横を通って士郎の傍へ走ったが、男に襟を掴まれて私の手は士郎に届かなかった。

「おい、まじかよ。目撃者を消そうと追っかけてきたってのに、消すどころか増やしちまうとはな…」

「は、離して！バカ！変態！警察呼ぶわよ！？」

「おいおい、変態は無えだろ、変態は」

「てめえ！用があるのは俺だろう！志都ねえは関係ない！離せよ！」

「わりいな、坊主に姉ちゃん。見られちゃったもんは仕方ねえからな。二人まとめて…死んでもらうぜ！」

そう言うなり男は私を土郎の方へ放り投げて赤い槍を構えた。それにつられて私は土郎を背にして刀を構えた。

襲撃（後書き）

どこで切ればいいのかわからなくてなんだかグダグダに…。

襲撃2

「オラアッ——！！」

「くうっ——！！！！」

後ろに士郎が居ることと繰り出された槍をよけることが出来ず、なんとか刀で軌道をそらした。

「ほう…その剣、結構な魔力を感じる…なるほど、読めたぜ。姉ちゃん、あんた魔術師だな。道理でその坊主が生きてるわけだ」

「な、なんで分かったの…って士郎が生きてるって、アンタ何言ってるの…？」

私が魔術師であるのと士郎が生きてるのに何の関係があるの…？

「何ってその坊主はさっき俺が殺したんだがな、あんたが何らかの魔術を使って生き返らせたんだろ？」

「殺した…？士郎を…？」

じゃあ、士郎の服が血まみれになっていた原因はコイツに殺された

から…？でも、それだと士郎が今生きてココにいるのはおかしい。だって、コイツなら殺しそこねたなんて事はないだろうし、そもそも士郎は服はぼろぼろだけど無傷だ。

コイツは私が治したと思ってるらしいけど、私はそんな事した覚えもないし、そもそもそんな芸当は出来ない。

コイツが本当に士郎を殺したというなら、他の誰かだ。他の誰か、魔術師が士郎を救ってくれたんだ。

思考の海に片足を突っ込んでいた私に、男は構えを解いて言った。

「ま、あんたが魔術師だって言うならあんたを殺す理由が無くなっちゃったな。そこをどきな。俺が用があるのはもうその坊主だけだからよ、もともと女相手はやる気が出なくてね」

「ばっ馬鹿じゃないの！私が退いたらアンタ士郎を殺すんでしょ！？退くわけ無いわよ！」

私が引く姿勢を見せないで居ると、男はため息をついた。

「…まあ、普通はそうだよな…あんたいい女だな、男のために命張れるとは。本当、つくづく俺はいい女に縁が無え…」

「は…はあ？何言って…弟を護るのは姉の役目なんだからあたりまえでしょ！」

こ、コイツ本当に何言ってるの：！？とにかく今のうちに士郎だけでも逃がさなきゃ。

私は後ろにいる士郎に背を向けながら勢いをつけて飛んだ。

士郎の後ろにはガラス戸があり、その向こうは庭になっている。そこからなら逃げられるはずだ。

私があわてていたせいか、士郎が先ほどの会話を聞いて呆けていたせいか、勢いを殺しきれなかった私たちはそのままガラス戸に突っ込んでしまい、盛大な音を立ててガラスを割り、庭へ落ちた。

「！？ いっ！——っ、志都ねえ、大丈夫か！？」

「し、ろう！ごめんね！でも今はとにかく逃げなさい！そんなもんで戦えるわけ無いでしょう！」

すぐに立ち上がって士郎の方を見ないでそう告げると、士郎は一瞬迷ったようだが、すぐに駆けていく音が聞こえた。って、ちょっと待て士郎！そっちは門のほうじゃなくて土蔵の方じゃ…。

ホッとしたのもつかの間、士郎が向かった方向が門ではなく土蔵の方だと気づき、あわてて外へ逃げるよう言おうとした途端、前方から男が槍を突き出してきた。

さっき避けたように刀を使って方向をそらす。

「邪魔をするってんなら、あんたは俺の敵だ。せいぜい楽しませて

くれや」

男はさっきまでの気のいい雰囲気消して獰猛な豹のような笑みを浮かべ、私が答える前にまた槍を繰り出してきた。

上、下、上、右、下、左、左：とランダムに攻撃してくるが、どれも対応できる速さだった。

これなら、これなら勝てるかもしれない！と気を緩めた瞬間、舌打ちが聞こえ、わき腹へ真横から衝撃が走った。

「あっ——っ　う！！！」

「志都ねえっ！！！」

そのまま慣性に従って体が飛んでいき、ガツンツと硬い何かにぶつかって止まり、そのまま倒れた。

近くから土郎の私を呼ぶ声が聞こえ、うつ伏せに倒れた上半身を起こして、そちらを見ると土蔵の中に土郎が見えた。私は土蔵の壁まで吹き飛ばされたらしい。

さっきまでいた場所から土蔵はそれなりに離れているはずなのに、私を吹き飛ばした張本人の声がすぐ近くで聞こえた。

「わりいな姉ちゃん。素人相手に遊んでる暇あったら、さっさと終わらせろって雇い主がうるさくてな。あんたは後だ。先に坊主からやらせてもらうぜ」

なんだ、私がああ槍の攻撃をそらす事が出来たのは何も、私とこの男のレベルが同じだったというわけではなく、私は遊ばれていたのか。

それもそうか、始めてこの男を見たときに自分でコイツは人間じゃないって、人外だって感じたじゃないか。

どこか納得したように下から男を見上げる。ああ、本当にコイツ格好いい。

月を背にして立つ姿に最初に感じた神聖さを感じる。時が止まったように感じ、男の青い髪と対照的な赤い瞳を見つめる。

さっきまで抱いていた恐怖や敵対心が、体を吹っ飛ばされた瞬間にどこかに飛んでいってしまったらしい。

「もしかしたら、あんたが7人目かもしれないな…坊主を守りたかったら呼び出すしかないぜ…」

なにか呟いたようだが、呆けていた私はそれを聞き取れなかった。

男はそれ以上何も言わず、土蔵の入り口へ歩を進める。

男が動き、止まっていた時間も動き出した。私は酷く痛む体に鞭打って立ち上がろうとする。けれど、体は言うことを聞かない。

立たなきゃ、立って、立て、立て、立て立て立て立て立て立て立て立て立て立て……！！！！！！！！

立って！立ってよ！立たなきゃ士郎が、士郎が殺されちゃう！！

私が士郎守らないで誰が守るの！？立て！！！！！！

自分を奮い、刀を支えにやっと立ち上がり土蔵へ目を向けると、土蔵から目を開けていられないほどの光が走った。

それと同時に土蔵へ入ったはずの男が出てきた。

「まさか、本当に7人目だったとはな…」

男は槍を構えながら私にそう言った。

今の光は何？7人目ってどういうこと？士郎はどうしたの？そもそもアンタは何者なの？聞きたいことがたくさんあるのに私の口は動かず、代わりに支えにしていた刀を構えた。

土蔵から士郎が出てくる気配はないが、不思議と不安な気持ちにはならなかった。

私は息を大きく吸って、掛け声とはお世辞にもいえないような叫び声を上げながら、目茶苦茶に刀を振り回しながら男に突っ込んだ。

「ああああああああああああつ——！！！！！！」

「つくそ、！？」

結局そのどれもが男に当たることはなかった。
最後に大きく振りきったときにバツンだか、ブチンだかまるでテレビの電源を切ったときのような音がした。

直ぐに体の痛みに耐えきれずその場に倒れてしまった。

こいつはどうするんだろう、土蔵から出てきた男の目はさっきとは違って本当に私と戦おうと、私を殺そうとしていた。

このまま殺されてしまうのだろうか？嫌だな、死ぬのは私を殺したらこいつ、士郎はどうするんだろう。

でも、なんでか分からないけど、士郎はもう大丈夫なような気がする。

うつ伏せに倒れ体中痛くて指一本も動かせず、ぼんやりと考えていると、男が近寄ってきて私のすぐ傍でしゃがんで話しかけて来た。

「驚いたぜ姉ちゃん…自分が今何したか分かってるか？」

何言ってるんだこいつ、そんなに私の行動が無謀かつ馬鹿げていると言いたいのか？

ぶすくれて何も言わずにいると男はあきれたような顔をして続けて言った。

「その顔…分かって無えな…：あんたは今、俺と俺の雇い主を結ぶラインをぶった切ったんだよ。契約を切ったと言ってもいいな」

「…何…それ」

「何って…はあ、俺が聞きてえよ…」

ため息を吐きながら、男は優しい手つきで倒れた私を抱き起こしてくれた。

さっきまでと180度違う態度に戸惑うが、体を支えている手がさつき衝撃が当たったわき腹にあったため抗議する。

「ちよ、いったっ！痛い！わき腹痛い！」

「ああ、悪い。そういや蹴ったのここだったな」

あの衝撃って蹴りかよ！！

よ、嫁入り前の女の子を蹴るとかこいつ頭おかしいんじゃないの！？

わきから手をどけ、今度は背中を支えてくれる。

「アンタ、何普通に私のこと起こしてんの？…こ、殺すんじゃないの…？」

恐る恐る一番の疑問をぶつける。何だって自分で自分を殺さないのか？なんて聞かなければならないのだ。

男はなんでもないようにさらりと言った。

「ああ、そりゃお前、命令した忌々しい雇い主との契約が切れたからな。それに今の俺のマスターはそんな命令してないしな」

「契約が切れたって言うのは聞いたわ……。その今の：マスター？つて——」

誰よ。と聞こうとした私を男はあろうことか、落とした。

「いっ！！何す——」

私は男の背に向かって文句を言おうとしたけど、目の前から強い風が吹いてガキンツと鉄と鉄がぶつかり合う音が聞こえ、何も言えなくなってしまった。

襲撃2（後書き）

原作ではランサーは士郎が魔術師だと気づいてますが、こちらでは志郎が持っていた刀の魔力が強すぎて士郎の魔力に気づいてません。

あ、この刀と『お姉ちゃんのこと』に書いてある土蔵で見つけた魔術礼装は別の物ですよ。そっちは次の話で書きますよ。

赤い女の子と赤い男の人（前書き）

魔術礼装のこと書けませんでした…っ、次こそは…！

赤い女の子と赤い男の人

夜の住宅街を黒い髪を靡かせて赤いコートを着た少女が走りぬける。

「うるさい！とにかく助けなくちゃ。せっかく切り札まで使ってたのに、また殺されてしまうなんて骨折り損よ！」

少女の近くには誰もいないというのに、まるで誰かが傍にいるかのように話しをしている。

もしこの場に第3者がいて彼女の様子を目撃していたら怪しまれることこの上なかっただろう。

純和風の日本家屋が見えてくると、門前で少女の足が止まる。どうやらここが目的の場所のようだ。

「やけに静まり返ってるわね…もしかして、遅かったの…？」

少女が不安に彩られた声色で呟くと同時に、彼女の背後に赤い外套を羽織った褐色の青年がどこからとも無く現れる。
が、少女はそれに何の疑問も警戒心も無い。

「それを結論付けるのはまだ早い。それで、どうやって中へ入る。私が君を抱えてこの扉を乗り越えようか？」

「ええ。けど…あなた、目撃者を助けるのは感心しないって言って

なかったかしら？」

「なに、ここで動かなければ君がいつまでもこの事を引きずって行くのではないのかと心配だね。それで戦闘に身が入りませんでした、などと言われてはこちらが困る」

「なっ…」

青年の言葉に少女は憤りを感じたようだが、今はそれに文句を言っている時ではないと口を閉じる。

「もういいわ。お願い、アーチャー」

「了解した」

青年は少女の腰を支えるように手を添え、身を屈めると一度の跳躍で少女を抱えながら塀を乗り越えた。

瞬間、二人の目に入ったのは満身創痍の女性とその傍にいる誰かだった。

女性には見覚えが無いが傍にいる人物は忘れるわけが無い。こちらへ背を向けているが、分かる。

それは少女が大切な切り札を使ってしまった原因であり、同時にここまで走ってこなければならなかった原因でもある。

考える間も無く、少女は直感で青年に告げる。

「アーチャー、ランサーの方をお願い」

青年は頷くと少女を抱えていた腕を放し、どこから取り出したのか白と黒の一对の剣を両手に持ち、無防備にさらされている背中へと切りかかった。

少女は着地すると同時に、甲高い剣戟の音を響かせている二人を避けるように迂回して女性のもとへ走った。

◆志都◆

唯でさえ蹴られて痛いわき腹に落とされた衝撃が加わって、更に背中から落ちたものだから起きることすら出来なくて呆然と男の背中を見ていた。

文句を言おうとしたけれど、甲高い金属音に驚いて咽まで出掛かった文句は引っ込んでしまった。

この場には私とこの男以外には士郎しかない。まさか、士郎と戦っているのかと一気に血の気が引き、相手のほうを良く観察すると、真っ赤な服のどう見ても士郎ではない別人だった。

それにホッとしているとこちらへ走ってくる足音が聞こえ、首だけをそちらに向けると赤いコートが目についた。

「大丈夫ですか!？」

「え、誰」

「それより、ここにいるのはあなただけですか？衛宮君はどこに…」

「衛宮『君』って、士郎…？士郎なら土蔵に…って、あ！そうだ、士郎！なんであの子土蔵から出で来な…っ！！？」

走ってきたのは女の子だった。女の子は私の傍でしゃがむと衛宮君（たぶん士郎）がどこかと聞いてきた。

それedyやく土蔵から光が発せられてから士郎が出てきていないことを思い出し、あわてて起き上がると痛みに体が硬直して涙が滲んだ。

ほんとに痛い！わき腹だけじゃ無くて腹部全体に広がってる気がする！アイツ絶対許さないんだから！！

涙目で男の方を見ると、男は相手と距離をとった。

「まさか、さっきの今でまたお前と顔を合わせる事になるとは思わなかったぜ」

「ああ、私もまさかこのような事になるとは思っていなかった」

あの二人は面識があるらしく軽い口調で会話をしているが、どうも友達とかいう雰囲気では無いみたいだ。

その証拠に二人が纏う空気は剣呑で、口元は笑っているが目が笑っていない。

「君がここで引いてくれれば、こちらは余計な労働をせずに済むのだが、どうだね？」

「て言ってもなあ。こっちは目撃者は消さなくちゃならねえし、何よりマスターを置いて撤退とはいかねえだろ、普通」

言いながら青い方がこちらへ視線をよこす。

私はマスターなんてものになった覚えはないのだから…。と傍にいる女の子を見る。

「いや、なんでそっちなんだよ…」

違ったらしい。じゃあ…

「え…私!?!」

「まあ、そうなるな」

何!?!? どういうこと!?!?

混乱して絶句していると女の子が私から離れて驚いたように声を上げる。

「そんな…! じゃあ、あなた魔術師!?!」

「は、あ、えと、そう言って良いのか分かんないけど、一応…」

「なるほどね…あれほど用心深くせに目撃者の口封じには自らお出ましだなんて…随分と良い趣味してるのね、弱者をいたぶるのがそんなに楽しいのかしら？」

「はい？」

何だこの子、なんかやばくない？

魔術師って言うてるからにはこの子もそうなんだろうけど、その発想はいったいどこから来るんだ…。

とにかく誤解を解かなくては、と女の子に話しかけようとした瞬間、また甲高い金属音がして言葉が引っ込んだ。

「ちっ、そーいやあさつき召喚してたな。忘れてたわ」

「別のサーヴァント！？アーチャー下がって！」

赤い方は女の子の言葉に従ってゲームみたいにバックダッシュで下がった。

青い方はまた別の誰かと戦っている。

てか、また増えたの！？

さっきからずっと驚きの連続で碌な思考も出来ず、呆気にとられたまま戦っている二人を見ると、向こうから士郎が走ってくるのが見えた。

「待ってくれセイバー！こんなところで戦うなんて危険すぎる！」

「待てませんマスター。敵を前にして戦わない選択肢などありえない」

「は？おい、てめえのマスターはあそこで転がってんのだろうが」

「？何を言っているランサー」

「ちょっと！衛宮君がマスターって、どういうこと！？」

「うわぁ、何これ…訳わかんない…」

どんどん人が増えて收拾がつかなくなってる。

それもこれも全部あの青いのが家に来たからだ！

何なのこいつら！もうやだ…

「どうやら随分と厄介なことになっているようだな。どうするのかね、凜」

「くっ、ああ！もう！ちょっと！あんたたち、戦うの止めなさい！衛宮君もあなたも自分のサーヴァント止めて！」

「私のサーヴァントって…？」

「え！？遠坂、何でここに」

「断る！メイガス、あなたがどちらのサーヴァントのマスターかは知らないが、あなたたちはここで斃れてもらう！」

「セイバー！待ってくれ！あいつは俺の、なんと言うか…知り合いで」

「出来ません、マスター！」

「…へえ。セイバーのサーヴァントともあろうものが、主人の命令に背くの」

「な、っ…分かりました」

問答の末、決着がついたようで相手はおとなしく引き下がった。そこでやっと士郎がこちらに気づいた。遅い！

「志都ねえ！？お前！志都ねえに何したんだ！？」

士郎：お姉ちゃんのことを思ってくれるのは嬉しいけど、それならすぐにお姉ちゃんの傍に来て欲しいな…。

どうして青い方の男と対峙してるの…。

男は少しづつが悪そうに視線をそらしながら答える。

「あー、まあ許せ。まさかあんなに蹴りが綺麗に入るとは思わなくてな」

「そんなことより！こんな所じゃ話も出来ないわ。衛宮君、上がらせてもらおうわよ」

私の怪我は『そんなこと』らしいです。女の子は宣言した通りにまっすぐに玄関へと向かう。

私も士郎も置いてきぼりである。

「あ、遠坂ちよつと待ってくれ。志都ねえ起きれるか？」

「ムリ。痛い。起きれない。起こして」

仏頂面で士郎を睨む。たぶんこの子さっきまで私のこと忘れてた。絶対。

士郎に起こされるのを待っていると、予想もしない人物に軽々と抱えられた。

「怪我をしているのは腹部だけかね？」

「へ？」

確かこの人は青い方と戦っていた赤い方。なんでコイツに抱えられるの…？

「何かね？」

「あ、いえ何でもないです」

??? はて、ついさっきまで死ぬほど恥ずかしかったのに、顔を見たら羞恥が消えた。

なんだろう。いや、この歳で抱っこされてるっていう恥ずかしさはまだ残ってるけど、怪我してるからっていう免罪符がある分いくらか緩和されてる。

そうじゃなくて、初対面の男性、それもかなりのイケメンと間近にいるっていうのに全然ときめかないし、恥ずかしくない。私そんなに異性に免疫無かったはずだけど…って、自分で言ってる虚しくなってきた…。

赤い人はそのまま私の案内も無しに玄関へと辿り着いて上がると、勝手知ったる何とやらと言うように迷わず居間へと進む。

居間にはさっきの女の子が私が割ったガラス戸を魔術で直しているところだった。

「何か、ごめんね。そんなことさせちゃって」

「かまいません」

言葉は丁寧だけれど、その声はとんでもなく素っ気無く冷たいものだった。顔も無表情だし。

この子なんでこんなに私に冷たいんだ…私の怪我を『そんなこと』

って言ったり。

「それで、アーチャー。あなたはどのようにその人を抱えているのかしら？」

「私は君が早々に話をつけたいと思っているのではないかと察して、動けないでいた彼女を連れてきたままでのだがね。さて凜、彼女の手当てを頼む。私は治療のための魔術など心得ていないからな」

「どうして私が治療してあげなくちゃいけないのかしら。あなたも魔術師なら自分で治療したらどうですか？」

私今すっごい馬鹿にされてるんだと思う。しかし、そんなこと出来ればとっくにやっている訳です。

「彼女も私同様、治療の心得は無いようだぞ凜。考えてもみたまえ、自力でどうにかできるようならあんなところで無様に転がってなどいないだろう」

分かった。私この二人苦手だ。

「…分かったわ。ここにおろして。傷を見せてください、えつと…あなた、名前はなんと？」

「あ、はい、衛宮志都。士郎の姉です」

「姉…?」

赤い人は私をおろすと背を向けてしまった。

なんだかこの子と話していると怖くて敬語になってしまう。年上の威厳が…。

私が士郎の姉だと言うと女の子の眉間に皺が寄る。

「へえ、姉が弟を殺そうと…ああ、いえ、魔術師なら当然の判断ですね。私は遠坂凜です。衛宮君、いえ、士郎君とは同じ学校の同級生です。この冬木の地のセカンドオーナーでもあります」

「ちょ、っと待って、私が士郎を殺すって、何言ってるのあなた」

「…お互いに理解できていない事があるみたいですね…先に傷の治療をしてしまいます。その後にじっくり話し合しましょう。傷はどこですか」

「あ、はい…。えと、わき腹を蹴られたのと背中をすこし打ったの…です」

「蹴られたって、いったい誰に…うわ、青痣になってる…」

「あの青いのしかないでしょう!?! 士郎はそんな事する子じゃないもの!!!」

服を胸元までまくって患部を見せる。

ていうか思い出したらまたムカついてきた！あの青いの、絶対に許さん！絶対にだ！！

「そ、その辺りも後にしませんか…。それじゃあ先ずはわき腹から…」

そういいながら懷から宝石を取り出す遠坂さん。

なんで宝石？と一瞬思ったけれど、魔術の勉強をしているときに宝石に魔力を込めて魔術を行使する方法があるというのを聞いたことがあったのを思い出す。

そのまま宝石を怪我にかざすようにし、まぶたを閉じて集中する。

「—————A n f a n g ……」

すると宝石に蓄積されていたであろう光を帯びた魔力は私の腹部へ。暖かい温もりに包まれながら痛みが引いて楽になる。

そういえばさっきから士郎たちが来ない。青いのと一緒にいるってのが不安だけど、もう一人の人はなんだか強そうだから大丈夫だと思う。

私は遠坂さんに治療されながら士郎たちを待つことにした。

赤い女の子と赤い男の人（後書き）

お姉ちゃんのアーチャーに対する評価が『赤い方』から『赤い人』にランクアップした！

え？ ランサーの評価？ 絶賛低空飛行ですが何か？

※お知らせ

更新停止状態が続いて申し訳ありません。

現在、就職活動中のため暫く執筆が出来ない状況が続きます。

このまま順調に内定がもらえれば、早くて11月頃には更新が再開できると思います。

また、本作の第2話に当たる『冬木の大火災』なのですが、先日、文庫版F a t e／z e r oを読み終えてF a t e／z e r o読んでいないことが丸わかりな超オリジナル展開であることに気が付きました。

そこで第2話を大幅改訂、もしくは一から書き直そうと考えています。

同時に『お姉ちゃんのこと（設定）』に説明不足な点がいくつかあったので、そちらも修正等をしていきたいと考えています。

お姉ちゃんの聖杯戦争を楽しみして下さっている方々にはご迷惑をおかけして申し訳ありません。

気長にお待ちいただければ幸いです。

実は今、志都がランサーに心を開く過程をすっ飛ばして、二人がいちやついてる場面しか妄想できません。ぐぬぬ。

hollowみたいな日常のシーンばかりが頭に浮かぶ…。

P.S. 志都はどちらかというとキレデレです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7280r/>

お姉ちゃんの聖杯戦争

2011年10月8日17時25分発行